

エピステモロジーの伏流としてのスピノザ、あるいはプラトン : Knox Peden, Spinoza contra Phenomenology. French Rationalism from Cavailles to Deleuze **を読む**

著者	近藤 和敬
雑誌名	鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集
巻	82
ページ	43-55
別言語のタイトル	"Spinoza or Plato as a Subterranean Stream of French Epistemology.: Review on Knox Peden, Spinoza contra Phenomenology. French Rationalism from Cavailles to Deleuze"
URL	http://hdl.handle.net/10232/25160

エピステモロジーの伏流としてのスピノザ、 あるいはプラトン

—— Knox Peden, *Spinoza contra Phenomenology. French Rationalism from Cavailles to Deleuze* を読む ——

近 藤 和 敬

本稿は、Knox Peden, *Spinoza Contra Phenomenology. French Rationalism From Cavailles to Deleuze*, Stanford University Press, 2014 (ノックス・ペデン『スピノザ対現象学 カヴァイエスからドゥルーズへ至るフランス合理主義』以下SCPと略) について論評しつつ、二〇世紀フランス哲学の一領域であるエピステモロジーとスピノザという一人の近世哲学者との思想史的關係を探求するのに参考となる情報を抜き出すことをその主たる目的とする。そのうえで、ペデンの議論から見える新たな疑問として、そもそもエピステモロジーの伏流としての「スピノザ」という哲学者の役割を理解するうえで、「スピノザ」だけに注目するだけでよいのか (むしろプラトニズムあるいはギリシア哲学と科学を同時に考慮すべきではないのか)、という問いが生じることを示す。

一. SCPの意義

SCPの冒頭でも述べられているように、この本は英語でしかフランス哲学になじんでいない読者に向けて書かれている。それゆえその基本的な目的は、既存の (英語圏での) 二〇世紀フランス哲学史の理解を更新することにある。標準的な二〇世紀のフランス哲学史として英語圏で参照されるのはフランソワ・ドゥスの『構造主義の歴史』(全二巻、英訳は九七年) や、Alan D. Schrift, *Twentyth Century French Philosophy : Key Themes and Thinkers*, Blackwell, 2006などだろう。二〇世紀フランス哲学といえば、「生の哲学」(ベルクソン)、「実存主義と現象学」(サルトル、メルロ＝ポンティ)、「構造主義」(レヴィ＝ストロース、ラカン、ヤコブソン)、「ポスト構造主義」(デリダ、ドゥルーズ、フーコー、ガタリ) という図式が長らく日本においても定着してきたが、たとえば、標準的なフランス哲学小史の一つであるSchrift 2006もまた、その範疇を大きく逸脱していない。SCPは二〇世紀フランス哲学のこのような図式的理解を覆し、現代のフランス哲学 (バディウを越えてメイヤスーへとつながる) を生み出してきたフランス哲学の系譜を「合理主義」の本道へと返すことを目指している。そのため、そこでとられる論述上の戦略は、理論的な分析よりも、もっぱら多様な資料発掘と思想家の言説の横断的な比較をすることで、個々の著作の世界の中に分け入るといよりも (ただし、まったく思想内容に触れないというわけではない)、その著作群の外に広がる非言説的關係性を浮かび上がらせることにある (この点ではある意味でアルシーヴ分析を特化させたフーコーが一つの手本になっているのかもしれない)。それゆえ、論述も哲学的な議論を深めていくというよりも、むしろ哲学史のヴィジョンとしての拡がりの豊かさを求めているように映る。

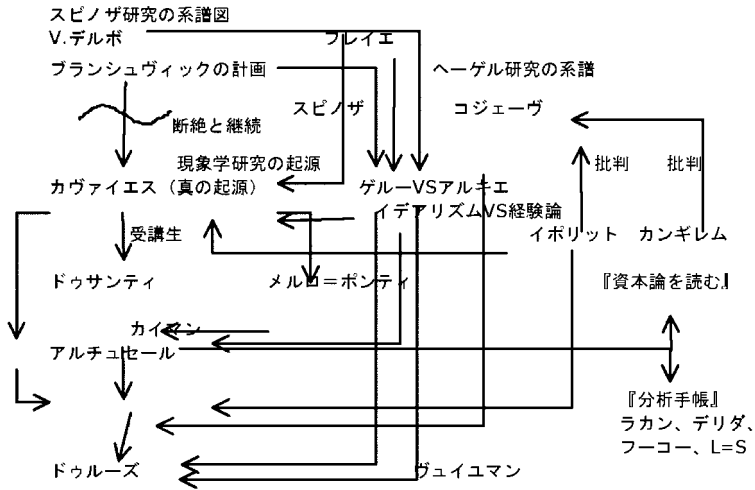
ただし、最初に述べたようなSCPの目的も考慮したうえで、SCPでの個々の節の議論を反復することは、既知のことがらを多分に含むために行わないこととする。むしろここで本書の価値として注目するのは、一つの書物としてまとめられたある一つの大きなヴィジョンにあると筆者は考える。したがってここでは、この大きなヴィジョンについて要点をまとめたうえで、さらに細部について意義のあると思われる情報を部分的に取り上げる。最後に、批判しうる点についていくつか述べたのち、筆者の見解を論じる。

二. SCPのヴィジョン

SCPのヴィジョンは、図表一を見るのが最も手っ取り早い（ただし図表一に登場する人名の著作と哲学にある程度通暁していることが前提されるが）。SCPに従えば二〇世紀のフランス哲学の起源は、ブランシュヴィック（Léon Brunschvicg, 1869-1944）のスピノザ論にある。その影響はカヴァイエス（Jean Cavailles, 1903-1944）とゲルー（Martial Gueroult, 1891-1976）という二人の弟子によって批判的に受け継がれ、カヴァイエスからはドゥサンティ（Jean-Toussaint Desanti, 1914-2002）を介して、ゲルーからは直接にアルチュセール（Louis Althusser, 1918-1990）へと至る。そして、ゲルーからヴェイユマン（Jules Vuillemin, 1920-2001）を経てドゥルーズ（Gilles Deleuze, 1925-1995）へ、またスピノザについてはゲルーから直接にドゥルーズへと続く。

この関係図のなかで、カヴァイエスは現象学の最初のフランスへの紹介者の一人であり、また同時に最初の内在的な批判者でもあったという仕方で、スピノザと現象学の関係がつけられることになる。カヴァイエスにとって内在的であったこの問題は、ゲルーにおいては、アルキエ（Ferdinand Aluquié, 1906-1985）との対立という仕方で現れる。アルキエのデカルト論は、フッサールの『デカルト的省察』の影響下にあることがSCPでは描かれている（また、アルキエのハイデガー批判がドゥルーズに間接的に影響しているのではないかとの指摘もある）。「エゴ」あるいは「主観性」の経験が形而上学を中心問題となるアルキエと、閉じた哲学体系内部における「概念」と「構造」が問題となるゲルーという対立は、ドゥサンティにおいては、カヴァイエスから引き継いだスピノザ論ともう一人の師であるメルロ＝ポンティ（Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961）から引き継いだ現象学をどう折り合いをつけるかという問題として再び内在化される。この対立関係は、アルチュセールにおいて、今度は科学とイデオロギーの対立関係になり、科学の理論としてのエピステモロジーとイデオロギーの理論としての精神分析という関係に鑄なおされる。

要するに、フランス哲学の本道は、カヴァイエス以来一貫して現象学とスピノザの内的、外的な対抗関係が生み出す振幅現象として理解されるということである。



図表一：SCP で描かれる人物相関図

このヴィジョンが説得的であるのは、その思想的な言説体系によるというよりも、むしろ制度的な分析によるところが大きい。以下の図表二（三行目）を見ると、SCPで主に扱っているのが、高等師範学校（以下ENS）の「カイマン」の系譜に属している哲学者と、ソルボンヌの哲学あるいは哲学史講座に属している哲学者とに集中していることがわかる。ソルボンヌの教授職は、当時ENSの教授職と兼任であり、アグレガシオン制度において、ENSの教授職とカイマンからの影響力は絶大であることはしばしば言われることである（Schrift 2008）。そのように同時代に対して影響力を行使するもの同士のあいだでの世代を超えた直接的な影響関係に焦点を当てることで、ドゥサンティとアルチュセールのような一見すると個別作品内の言説に現れない影響関係を明らかにしているところが、SCPの醍醐味であるとも言える。

ソルボンヌ「歴史科学との関係における哲学」講座の系譜	IHS/IHST/HPSTの系譜（講座に不確定な力所あり）	IHSTの初陣メンバー構成。
Gaston Milhaud, 1909-1918 Abel Ray, 1919(Braunstein2006 174)-1940 Gaston Bachelard, 1940-1954 George Canguilhem, 1955-1971 以下おそらくRay以後は右と連動。	Abel Ray, 1932-1940 (独立者) Gaston Bachelard, 1940-1955 George Canguilhem, 1955-1971 Suzanne Bachelard, 1972?-1985? François Dagognet, 1986-?? Jean Pierre Sériis, 91-92 Jacques Bouveresse, 1992-1995 Anne Fagot-Largeault, 1998-2001 Jacques Dubucq, 2002-2009 Jean Gayon, 2010-	1933: The IHS becomes IHST (Institute for the History of Science and Technology). Technology). The Institute is attached to five Faculties of the University of Paris and is placed under the supervision of the Academy of Paris (Rectorat de Paris). First president: Sébastien Charlutzky. The steering committee is expanded to accommodate 75 members among whom are included the following: Césaire Bachelard, Léon Brunschvicg, Lucien Febvre, Étienne Gilson, André Lalande, Marcel Mauss, Léon Robin, Alexandre Koyré, Émile Borel, Louis de Broglie, Léon Brillouin, Élie Cartan, Jean Perrin, Émile Picard, Paul Tannery, Pierre Teilhard de Lila (http://www.ihst.cnrs.fr/node/143).
コレージュドフランスの「一般科学史講座」の系譜 Auguste ComteからGuizotへの要略（19世紀前半） Pierre Laffitte, 1892-1903（実証主義の公式の後継） Grégoire Wyruboff, 1903-1913 なし1914-1919 Pierre Boutroux, 1920-1922（科学史） なし1923-1999	コレージュの哲学史から認識論（分析哲学）への系譜 32-50: ジルソン（中世哲学史） 51-62: ゲルソー（哲学体系の歴史と技術） 63-68: イボリット（哲学的思考の歴史） 70-84: フーコー（思考体系の歴史） 86-91: グランジェ（比較認識論）	コレージュのキリスト教ラテン哲学から認識論の哲学への系譜 1900-1904: ベルクソン（キリスト教ラテン哲学） 1500年代から続く講座） 04-04: タルト（現代哲学） 04-21: ベルクソン（現代哲学） 21-40: ルー・ロフ（現代哲学） 41-51: Louis Lavelle（哲学） 52-61: メルロー＝ポンティ（哲学） 62-90: ヴェイユマン（認識論の哲学）
Anne Fagot-Largeault, 2000（生物科学と医学の哲学） Jan Hacking, 2000-2006（科学的概念の歴史の哲学） ソルボンヌの哲学と哲学史教授の系譜 Victor Brochard, ??-?? Octave Hamelin, 05-07 Victor Delbos, 04-16 Léon Brunschvicg, 09-39 Léon Robin, 1913-1936 Émile Bréhier, 19-25 Étienne Gilson, 21-32 Marcel Gueroult, 45-51 Ferdinand Alquié, 52-76 Jean Hyppolite, 54-62	95-2010: フーヴレス（言語と認識の哲学） 2011: Claudine Tiercelin（認識の形而上学と哲学） ENSのカイマンの系譜 Jean Cavallès, 31-35 Maurice Merleau-Ponty, 35-39 Georges Gusdorf, 39-48 ただし40-45年はドノツの整数に入ってる） Louis Althusser, 48-80 Jacques Derrida, 65-67 （Schrift2008,452より） ??? ??年-2009年: Quentin Meillassoux	

図表二：ソルボンヌ、IHST、コレージュ・ド・フランス、カイマンにおける諸系譜

さらにこのカイマンとソルボンヌの哲学者の系譜が、フランス哲学の本道であるともみなしうる別の理由として、SCPでも詳しく扱われている二〇世紀前半から後半にかけてのフランスの政治体制の変化とそれに対応する左派的思想の実体の変化との照応関係が挙げられる。簡単に述べれば、戦前と戦後で、特にフランス共産党の前景化とその後の後退（ポーランド革命などを契機として）を境に、「連帯主義solidarism」（労働組合を中心とした国家社会主義）から「スターリニズム」、そして「毛沢東主義」へとENSを支配する左派的思想傾向が変化するということである。「連帯主義」を代表しているのはエミール・デュルケイムだが、ENSで影響力をもっていたのは、デュルケイム派の社会学者のセレストン・ブーグレ（Célestin Bouglé, 1870-1940）であり、カヴァイエスの世代は彼から教育的にも制度的にも強い影響を受けている。その後、パリの占領と解放において「フランス共産党」がかなり大きな役割を果たすことになることを契機に、それ以前からすでに徐々に拡大していた共産党系の勢力が、戦後になってかなり強化される。その際に思想の側で先頭に立ったのがドゥサンティである。この役割は一九五六年に彼が党を去るまで続くことが、党機関紙の分析などからSCPでは詳細に描かれる。その後、「スターリニズム」の問題点が明らかになるにつれて「毛沢東主義」が注目を集めるようになり、毛沢東主義をとるアルチュセール（彼はドゥサンティが去った後も党に残っている）の発言権が政治的文脈のなかで強化されるようになるが、その時彼はすでに「カイマン」としてENSの多くの学生に影響力を持っていた。つまり、いずれもここで扱っている哲学者たちによって、当時の政治的、社会的思想の潮流が生み出されていたかあるいは少なくともそれと緊密に結びついていたという歴史的事実が、この系譜の学史的な正当性を補助的に示唆している。

ところで、スピノザをめぐる二〇世紀フランス哲学の迷走の一つの重要な原因は、この政治思想の潮流の変化にある。すくなくともカヴァイエスとゲルーは、自らの政治的で宗教的な立場を、スピノザの『エチカ』によって基礎づけようとは考えなかった。確かにカヴァイエスの政治的行動も宗教的行動も、本人も述べているようにスピノザ主義者のものであるとみなされうるが、その一方でそれらの行動が『エチカ』によって、つまり倫理によって正当化が為されうるとは認められていない。その一方、ドゥサンティもアルチュセールも、ともに『エチカ』という形而上学的体系によって、自らの立つ政治的な立場の正しさを基礎づけようとする（アルチュセールにおける科学としての歴史的唯物論がその最たるものであり、ドゥサンティの場合、たとえば『哲学史入門』における議論に見られる）。この思考様式は、アルチュセールの後にドゥルーズへと引き継がれ、さらにネグリの『構成的権力』およびハートとの共著である『帝国』の議論にまで至る。しかしこの正当化という目的に従って、スピノザの『エチカ』それ自体が歪曲されてきたということは、しばしば指摘されてきた¹。問題がさらに複雑化するのには、この時正当化された立場から批判される対象が常に一つと同じ現象学であり、したがって現象学の対立項としてのスピノザというものの姿が捻じ曲げられている以上、この現象学にたいするスピノザに依拠した批判というものもまた同様にある種の捻じれを含むことになるということである。

スピノザ主義者たちの現象学あるいは実存主義に対する反感というのは、したがって一枚岩では

¹ たとえば、上野二〇一四所収「ネグリのマルチチュード論とスピノザ」を参照。

ないのではないかということも容易に想像することができる。ドゥサンティ以降、そしてアルチュセールに至っては極端に、実存主義と近接関係におかれた現象学は、明確に新トマス主義や宗教系保守派の思想と一緒にされながら退けられる傾向が強くなる。この時、「スピノザ主義＝唯物論＝無神論」という極端な等号化が行われることになる。

しかしながら筆者の見解によれば、カヴァイエス自身のスピノザ主義は、その後継者たちのスピノザ主義よりもっと微妙な点で、実存主義²的な宗教認識を批判していることになるはずで、その点において唯物論の立場をとる彼らの批判とカヴァイエスの批判を簡単に等号で結んでしまうことはできない。微妙な点でとここで筆者が述べるのは、カヴァイエスが宗教的なものそれ自体をまるごと否定するのではなく、宗教的なものについての理解をめぐって、理解の内部に対立軸を置き入れるということである。端的に言えば、彼の批判の矛先は、宗教的なものの理解に先立って、その理解の枠組みとして行為と認識が明示的に分けられるという立場（この立場は、エデュアール・ル＝ロワのそれを想起させるが）に向けられる。それとは反対に行為と認識は分離不可能であると考えたカヴァイエスは、認識を戯画化してそれを退けたうえで、人間の行為を住処とする「存在論的神秘」に耽溺する哲学（具体的にここでカヴァイエスが名指しているのはガブリエル・マルセルの思想である）を、「哲学の自殺」行為として退ける（Sinaceur 2009, 28）。認識と行為は分離不可能であるからこそ（つまり認識が行為にたいして優越するがゆえにはない、ということに注意されたい）、カヴァイエスは、数学や現代物理学という思考に内在した概念の哲学を目指したのだった。

したがって、ドゥサンティやアルチュセールのスピノザをスピノザそのものとして受け取れないのと同様に、彼らの現象学批判もまた無批判に受け入れることのできないものである。後で見ると、ドゥサンティの現象学批判がカヴァイエスの現象学批判に基づいたものであり、アルチュセールのそれがドゥサンティとカヴァイエスに基づいたものであるならば、その起源となったカヴァイエスの現象学批判の実体がなんだったということを理解することが最も重要な課題となるだろう。

カヴァイエスの現象学批判を、先ほどの行為と認識の不可分理性というところから導くなら次のように言われうるだろう³。認識は行為であり、行為はまた認識でもあるならば⁴、作出的なeffective認識を離れた認識なるものは存在しえない。カヴァイエスは、フッサールがこの作出的な思考を離れて「超越論的エゴ」へと向かうところでフッサールと袂を分かち、少なくともカヴァイエスにとっては、概念の思考を基礎づける超越論的エゴにおいてではなく、概念の産出的思考それ自体のうちこそ、「神的なもの du divin」があると考えられたのである。そこで見出される「神的なもの」においてはもはや、理性と信仰の区別、あるいは理性と感情のあいだの基礎づけ関係的優劣といったものは存在しない。それらは同じ仕方でもことにあたる。

² カヴァイエスの三〇年一〇月七日付のボルンへの手紙の標的はもっぱらガブリエル・マルセルの思想である。

³ 『論理学と学知の理論について』に基づくカヴァイエスのフッサール批判については、同翻訳書所収の拙著「解説」に詳しいのでそちらを参照されたい。

⁴ この行為と認識のあいだの平行論は、ボルン宛の手紙において最も具体的に論じられ、また数学の認識においては、「知性・感性の混成体」としての「記号」という『公理的方法と形式主義』での議論に現れるが、抽象的な定式としては、『論理学と学知の理論について』の以下の文言に現れる。「作用acteなしに意味sensは存在しないし、新しい作用を発生させる意味なしには新しい作用は存在しない。」（カヴァイエス二〇一三、三二頁）

カヴァイエスの『論理学と学知の理論について』と『連続体と超限無限』の議論を見る限り、カヴァイエスのフッサール批判の本質的な点は、人間的な自己意識としての「エゴ」の役割を、アイデアの内的連鎖からなる産出的知性へと至る、それ自体不可欠（あるいは不可避）かもしれないが、最終的には捨てられるべき魂の一段階として制限することにあるように思われる⁵。カヴァイエスにとって「自己」＝「エゴ」の「滅却'oubli」によって、すなわち「数学のなかで内在的に、愛のなかで超越的に神への接近を顕示するこの必然性に喜んで恭順すること」（Sinaceur 2009, 27）によって、道は進んでいくのである。このカヴァイエスの発想は、単にスピノザの哲学にのみ由来するものと考えられるよりも、ブランシュヴィックのデカルトからスピノザへと至る合理性の理解、そしてデカルトとスピノザの合理主義哲学の起源を、古代ギリシアのプラトンおよびローマ期の新プラトン主義にみるブランシュヴィック、ミヨー（Gaston Milhaud, 1858-1918）、ロバン（Léon Robin, 1866-1947）、ブレイエ（Émile Bréhier, 1876-1952）、レイ（Abel Rey, 1873-1940）、コイレ（Alexandre Koyré, 1892-1964）らの当時の科学史と哲学史の横断領域で研究をしていた哲学者たち（ブランシュヴィックを除けば、SCPでは彼らについてまったく触れられていない）の見解がその下敷きにあると考えた方が、説得的であるように思われる⁶。

本節での議論をまとめると、SCPの議論は、哲学的言説内部の分析に留まるならそれほど説得力をもちえない⁷ 図表一のような二〇世紀フランス哲学史についての新しい理解を、教育上の制度の分析と、政治思想と社会状況の変化の分析を関連付けることで、またそのために様々な主著以外の資料を駆使することで説得的なものとしているところがその最大の特徴であると言えるだろう。

三. SCPの細部

SCPの細部において重要性は、個々の哲学者の思想内容の要約にあるというよりもむしろ、その個々の哲学者の間の具体的に思想的な連関の根拠にこそある。これについて、特に図表1と関連する相関関係で、SCPから取り出しうるものについて、ドゥルーズに関連するものを除きほぼ網羅的な仕方で本論末尾に附された図表3において示しておいた。

細部において図表3にまとめられているもののなかでもとりわけカヴァイエスと関連すると思われるところだけ、簡単に抜き出しておく。先ほどの図表1においては、重要なラインが、カヴァイエス、ドゥサンティ、アルチュセールというものと、ゲルーからアルチュセール、ゲルーからドゥルーズと続くものとして示されていた。このとき、このカヴァイエスからのラインと、ゲルーからのそれという二本のラインが単に平行線以上の内的関係をもちうるということの根拠とされているのは、おおよそ以下のことがらである⁸。

⁵ 一九三九年のブランシュヴィックへの手紙に登場するフッサールの『ヨーロッパ諸科学の危機』への評価としての「コギトの法外な使用」（Ferrières 2003, p. 182）を参照。

⁶ シナスールは、Sinaceur 2009でこれを、「プラトニズム」を「ラディカルな合理主義」（Cavaillès 1925, 132）とみなすカヴァイエスの特殊な見方として指摘している（Sinaceur 2009, 11）。シナスールも議論していない重要な論点は、ここで筆者が指摘しているように、この「プラトニズム」によって暗に示されているものが、具体的に何を内実としてもちうるのか、ということの可能性を明示することである。

⁷ 既存の方法である一人の哲学の著作をコーパスとする言説分析ではほとんど証拠を挙げることのできない関係性が含まれている。たとえばドゥサンティとアルチュセールの関係性などは、彼らの公刊された著作をコーパスとしたのでは、確認されるものではない。

⁸ ゲルーがヒルベルトの形式主義に共感を示しており、カヴァイエスのそれと一致するというベデンの論点の一つはここでは省

- ・ゲラーとカヴァイエスの両者がスピノザ主義者である。
- ・両者がブランシュヴィックとブレイエの弟子であり、この二人から強い影響を受けている。またブランシュヴィックのスピノザ的合理主義を受け継いでいる点でも同じ (SCP, p. 69)。
- ・1940年、クレルモン＝フェランのキャンパスに疎開していたストラスブール大学で1年間ほど同僚だった (ただし実際の交流があったかどうかは不明) (SCP, p. 277, n. 94)。
- ・カヴァイエスとゲラーの両方から影響を受けているグランジェとヴェイユマンがそれぞれ両者のあいだの共通性について論じている (SCP, p. 281, n. 8)。

少なくとも確実に言えるのは、この両者の哲学がブランシュヴィックのスピノザ論の枠組みにおいて形成されているということであり、これは動かない事実である。しかし、それ以上の根拠については、状況証拠と呼べるものしか挙げられていない。したがって、この点については、おそらくブランシュヴィック以外の筋を考える必要があるだろう。

次にカヴァイエスとドゥサンティの関係である。カヴァイエスから直接教えを受けて影響を受けている哲学者には、ドゥサンティ、ヴェイユマン、グランジェなどがあるが、三五年頃からドゥサンティはブランシュヴィックよりもカヴァイエスに惹かれて数理哲学と論理学に取り組み、彼の現象学批判を吸収したことが、ドゥサンティの伝記と講義ノートなどを根拠にして示されている。

ドゥサンティがカヴァイエスから吸収したことがらは、一九四〇年代後半に行われた戦争で勉強の中断を余儀なくされた学生のための復習セミナーにおいて、ドゥサンティからアルチュセールへと伝えられることになる。このときに教えられていた内容については、ドゥサンティとアルチュセールの双方のアルシーヴに残されたノート類によって証左されているが、その内容は「古代哲学から「論理主義」や現象学、そしてスピノザの哲学にまでいたって」(SCP, p. 98) おり、とくに論理主義と現代物理学の講義のなかに、カヴァイエスからの影響が示されている (SCP, p. 139)。

また、アルチュセールから直接カヴァイエスへとつながるのは、ドゥサンティを介するほかに、彼の親友であり早くに自死したジャック・マリタンの影響があることがアルチュセールの伝記資料から知られている。またSCPによれば、「アルチュセールのアルシーヴは、彼が比較的若いときに、カヴァイエスの博士論文に親しんでいたことを示すノートブックを含んでいる」(SCP, p. 139: ALT-A56-11) ということ、当時公刊されて読むことのできた『論理学と学知の理論について』のほかにも、『公理的方法と形式主義』になにかしらの関心をアルチュセールがもっていたことがうかがえる。

4. SCPの問題点

根本的な問題としてSCPにおける「合理主義」や「合理性」という語彙の内実が最初から最後まで曖昧なままに留まっている点が挙げられる。敢えて言えば、経験や主観性よりも概念や客観的構造を重視し、知覚や感覚よりも知性を重視し、主にスピノザの『エチカ』における二属性の平行論と『知性改善論』における真理の内的規範論に依拠する哲学、ということになるだろう。言い換え

略した。というのも、カヴァイエスの数学基礎論の立場を単純にヒルベルトの形式主義のそれと一致させることは難しいと筆者には思われ、そのかぎり、この点でもって両者を結びつけるのは無理があると判断したからである。

れば、SCPの見取り図である図表1のような拮がりにおいて共通点を探せば、せいぜいのところこの程度のものにしかならない、ということになるのかもしれないが、これではなぜスピノザでなければならないのか、という疑問に答えることが充分にはできない。

またカヴァイエスの数理哲学についても、いわゆるカントール主義から続く形式主義者たちの主張をそのまま擁護しているように書いており (SCP, pp. 41-42)、またそのことによってスピノザの無限概念と集合論的な超限無限概念とが、カントールのな (つまり実在としての連続体という) 発想のもとで結びつけられていることは、カヴァイエス数理哲学の解釈の上でも、スピノザの無限概念の解釈の上でも問題が大きいと言わざるをえない。まず、超限無限概念が、(フッサールの意味での) 直観的内容をそのまま充足することができないことは、連続体仮説の独立性を考えれば自明である。にもかかわらず、我々はある種の操作によって非可算無限濃度集合を形成することができるし、それをを用いて超限帰納法を用いた証明を行うことさえできる。このような事情に対して、可算無限のみを実体とし、非可算無限を虚構とするのでもなく、非可算無限を実体として可算無限をその制限物とみなすのでもなく、その両者を概念的構成物である限りにおいて (したがってその概念的内容においてではなく) 等価とみなす、というのがカヴァイエスの立場であるように思われる。そのうえで、そのような概念的構成を支えるのが、合理的連鎖、アイデアの産出的連鎖である以上、そのような知性の能作を受け入れる「場」が必要であることとなる。それこそがプラトン以来の「アペイロン」、つまり「無限 (定)」であるということではないのか。むしろスピノザが「無限」と呼ぶのは、こちらの無限ではないのか。そして、カヴァイエスの「無限とともに真の数学は始まる」(カヴァイエス二〇一三、六三頁) という言葉も (当然、無矛盾性の自己証明が成立しない無限を扱う数学という意味と重ねながらも) この意味において理解されうるのではないのか。

SCPの議論のもっとも重要な限界は、それが設定している範囲にある。おそらく現代思想、とくに構造主義におけるスピノザの重要性というところから遡行してカヴァイエスに至ったというのが、本書執筆におけるペデンの実際的なきっかけであるように推測される。そのため、カヴァイエス以前の文脈から、どのようにカヴァイエスの議論が出てくるのか、ということがここでの議論ではわからない。ペデンが行った制度的分析をさらに推し進めるなら、図表二 (一行目) にあるように一九三二年に創設された「科学史研究所」HIS (後に「科学技術史研究所」IHSTと改名、現「科学技術と哲学の歴史研究所」IHPST) の役割は看過できず、さらにこれを設立するに至る過程において一九〇九年にガストン・ミヨールのために作られた「厳密科学との関係における哲学」講座、そして、この一九〇〇年前後に非常に活発に活動し始めることになるフランスの科学哲学と古代哲学研究とのかかわりを見る必要があるのではないだろうか。たとえばこの時代、古代の哲学と科学と現代の哲学と科学の関係の平行性と断絶という問題について論じた哲学者として、先ほど述べたブランシュヴィックやミヨールに加えて、タンヌリ (Paul Tannery, 1843-1904) やデュエム (Pierre Duhem, 1861-1916) などがあることを想起せねばならない。そしておそらくはその背景にあるクザン (Victor Cousin, 1792-1867) 以来のヘーゲルの影響を受けた観念論の哲学者たち (たとえば、ジャンネ (Paul Janet, 1823-1899)、アムラン (Octave Hamelin, 1856-1907)、プロシャール (Victor Brochard, 1848-1907) など) の仕事を参照せねばならないだろう。

そして、この観点を導入することの一つのメリットは、ベルクソンの位置とその影響をもう少しはっきりとさせることができるということにある。ベルクソンの位置自体が、まさに科学史、科学哲学、古代哲学の三領域にまたがるものであることを考慮すれば（ベルクソンのコレージュ・ド・フランスでの最初の講座は「ギリシア・ラテン哲学」である）、ブランシュヴィックとバシュラーのベルクソンに対する親近感と絶え間ない批判という両面を理解することができるのではないか。つまり、親近感とはその背景にある問題意識、つまり科学史、科学哲学、古代哲学という三領域を横断した形而上学を目指すという意識に対するものであり、その批判は、その問題意識に対するベルクソンの解決の不十分さの指摘、より完全な観念論の構築を目指した視座からでの指摘であったと理解することができる。したがって、この共通点をしっかり押さええない限り、そこでの論争は（たとえば主知主義か主意主義かといったような）不毛な党派争いに過ぎないということになりかねない。

さらにブレイエの新プラトン主義をめぐる議論はカヴァイエスに強い影響を与えているように思われるが（cf, Cavailles 1928）、この影響はブレイエがベルクソンの「プロティノス講義（一八九八—一九〇九年）」（『ベルクソン講義録 第四巻』所収）を受講したことにまで遡る。またブレイエは『現代哲学入門』で、ベルクソンとブランシュヴィックとブロンデルの三人を当時の二〇世紀の新傾向（スピリチュアリズム）を代表する思想家とし、「ベルクソンの師匠だとしてもベルクソンを貶めることにならないスピノザ、及びプロティノスの説」（ブレイエ一九五三、一二頁。強調は引用者による）と述べているように、カヴァイエスにおけるスピノザ的な「ラディカルな合理主義」も、このような新傾向のなかの一つの変奏として見るべきではないだろうか。

このようなSCPが設定している枠をさらに拡張することで得られるヴィジョンにおいて、もはや現象学かスピノザかという対立は消え去り、いずれもが古代から現代へと続き（あるいはむしろ現代において復活した？）、また厳密科学の進展とともにあったアイデア論を理解するひとつの試みとして理解されることになるのではないか⁹。以上の論点をSCPに対する根本的な批判とそれを越えたさらなる研究の方向性として示し、本論を閉じることとしたい。

⁹ 現象学それ自体のドイツでの文脈というよりも、少なくともフランス哲学においてはという意味で。ただし、新カント派の現象学とフランス哲学両方への影響関係を考慮に入れ、新カント派のもつ古代哲学と観念論と科学史への関心を考慮に入れることで（たとえば、コーヘンとカッシーラーのプラトニズムに関する業績およびそれと連携した関係を持つツェラーの業績を参照）、「フランス哲学において」という制限も解消されるかもしれない。ただし、その場合、新カント派と現象学の関係を今よりもいっそう近づけて理解することにはなるだろう。

図表 3：SCPにおける詳細部分

	SCP内からの引用あるいは要約（冒頭の数字は、SCPの対応頁数）
ブランシュヴィックとカヴァイエス	<p>「ブランシュヴィックの計画」：科学史の内的原理としてのスピノザの認識論、すなわち「観念の観念」=「意識の観念」を真理の方法と見る批判的観念論あるいは合理主義的観念論。『数理哲学の諸段階』</p> <p>（新しいことだけ）「カヴァイエスは、ブランシュヴィックが代表していた時代精神である「共和主義」（第三共和政の精神）に強く共鳴していた。」</p> <p>（補足：ブランシュヴィックと同様に強く影響を受けているセレスタン・ブーグレは、この「共和主義」の社会的かつ政治的実現を目指す「連帯主義」solidarismの伝統を受け継ぐデュルケイム学派の社会学者。ブーグレの前が、レオン・ブルジョワ。系譜にはほかにブルードン、モースなどが位置づけられる。ブランシュヴィックの政治的立場は、これらの社会的な実体を伴っていた者と思われ、またさまざまな制度的、社会的な決定（講座新設等含む）もこの理念とある程度合致しているものと思われる。30年代後半から、ポール・ニザンの『番犬』に現れるように、フランス共産党系から、この「共和主義+連帯主義」に対する批判が激しくなる。</p>
ブランシュヴィックとゲルー	<p>69「ゲルーは、ブランシュヴィックとブレイエから大きな影響を受けた。ブランシュヴィックのあとで、その代わりに44年からソルボンヌで教えた。」</p>
ブランシュヴィックとドゥサンティ	<p>106-107「ドゥサンティがブランシュヴィックについて好んだことは、第一章でブランシュヴィックのスピノザ主義と同定されるものである。ブランシュヴィックは、エンゲルスの意味でイデオロギー的な本質を残している点で批判される。」</p> <p>272n24「1993年の『数理哲学の諸段階』への序でドゥサンティは、ブランシュヴィックが彼自身のスピリチュアリズムと対抗馬であるベルクソンのそれとをいかに巧みに和解させたのかということについてコメントを書いている。」</p>
カヴァイエスとドゥサンティ	<p>8, 47「ドゥサンティは、カヴァイエスがカイマンだった時代とその後、およびパリに戻っての2年のあいだに大きな影響を受けた学生のひとりである。」</p> <p>61「カヴァイエスのもっとも直接的な後継者。」「カヴァイエスは常にヘーゲルを「信用」していなかったとドゥサンティは述べている。」</p> <p>95「コルシカ生まれ。数学、ラテン語、ギリシア語という古典的な科目の知識を強化するためにパリに来たが、数学的背景によってカヴァイエスの教えを受けるように導かれた。当時哲学の『王道』だったブランシュヴィックによって与えられていた哲学にはなじめなかった。つまり、それはプラトンであり、デカルトであり、スピノザであり、最も人気だったカントである。カヴァイエスは論理学に技術的な焦点をより狭く当てていたので、このことがドゥサンティを彼にいつそう近づけた。」</p> <p>97「35年以降、カイマンとなったメルロ＝ポンティから現象学の教育を受ける。カヴァイエスとメルロ＝ポンティのあいだの緊張関係が、ドゥサンティの哲学を形成している。」</p> <p>98「ドゥサンティはカヴァイエスの最後の学生の一人であり、同時にアルチュセールの最後の教師でもある。1940年代にドゥサンティはENSで非公式のセミナーを開催しており、第二次世界大戦で教育が中断されていた学生、アルチュセールのような学生の再教育のために行われていた。アルチュセールのアルシーヴはこのときの授業のノートを含んでおり、それは、古代哲学から「論理主義」や現象学、そしてスピノザの哲学にまでいたっている（注15：ファイルALT2-A56を参照せよ。そこにはフッサールについておよび物理学の発展についてのドゥサンティの講義に充てられており、そこでは古代思想と現代の出来事にも言及されている。ALT2-60-09は、ドゥサンティのスピノザ講義に充てられている。これらのファイルはIMECのアルチュセール文庫にある。287 n15）。ドゥサンティのアルシーヴにはこの同</p>

	<p>じ時期からスピノザについてのノートが含まれており、そのいくつかは講義の教材のように見え、そのほかは公式の出版物のためのドラフトのようである（注 16：ドゥサンティの書類は、公式には IMEC の管理下に置かれているのだが、整理の過程で、（正式にはフォントニー・サン・クロードに、しかし現在はリオンにある）ENS-LSH のキャンパスの、ジャン・トゥサン・ドゥサンティ研究所に保存されている。研究所のヴァーチャル資料で閲覧可能。）。</p> <p>108 「ドゥサンティの後期の著作は、カヴァイエスのプロジェクトを要約したものであって、それは彼の最初の師によって解かれなかった問題のいくつかに挑戦するものとして読むことができる。実際、『数学的理念性』におけるプロジェクトは、「アイデアのアイデア」というスピノザの原理からインスパイアされている「主題化」の神秘を開くための努力である。スピノザの観点において、またカヴァイエスによる拡張された観点においては、唯名論的である「第一の」アイデアは、そのようなプロセスにとっては物質性をもたないものが何であれ、なんらかの物質的現れの認識である。しかしながら、このアプローチの問題は、のちにドゥサンティを試すことになる。すなわちプラトニズム的観念論への後退。（Desanti, "A Path in Philosophy", in <i>Philosophy in France Today</i> ed. Alan Montefiore, trans. Kathleen McLaughlin, 51-60 を参照）」</p> <p>「ドゥサンティの現象学批判は、カヴァイエス由来のものであって、その限りでスピノザに依拠したものである。」</p> <p>286n5 「カヴァイエスの MAF のエルマン社からの再版版へのドゥサンティの序「ジャン・カヴァイエスの思い出」を参照せよ。そこで彼は、彼のメンターについて「自身のことをスピノザ主義者だと考えていた彼（カヴァイエス）」という仕方而言及されている。」</p>
<p>カヴァイエスとメルロ＝ポンティ</p>	<p>96 「メルロ＝ポンティがカヴァイエスの後任のカイマンで、ドゥサンティの教育にあたった。」（カスー＝ノグスによる調査結果など（メルロ＝ポンティと一緒にルーヴァン・カトリックのアルシーヴに行ったことなど）は書かれていない。）</p>
<p>カヴァイエスとイポリット</p>	<p>61 「イポリットは、カヴァイエスの議論の多くとヘーゲルの『論理学』の議論の多くが近い関係にあることについて熱心に注釈をつけている。」</p> <p>28n130 「『論理と実存』 52-53 と「数学的思考」でのイポリットの発言で、数学が自律的な本質的生命をもつことに同意している。」</p>
<p>カヴァイエスとアルチュセール</p>	<p>8-9 「マルクス主義は、後にアルチュセールがその砂の上に彼の線を描くことになる地面ではあるのだが、彼の議論の実体は、それとは別のところでカヴァイエスとゲルーによって展開されたスピノザ主義的合理主義と共鳴している。」</p> <p>139 「より困惑させるのが、カヴァイエスの主題である。というのもカヴァイエスはアルチュセールの著作を通じて一貫して称賛されるものの、スピノザ自身ほどには理論的な関心が向けられていないからである。ドゥサンティの論理実証主義と現代物理学の講義は、カヴァイエスの理論的影響を示している（注 52 ALT2-A56-12）。そしてアルチュセールのアルシーヴは、彼が比較的若いときに、カヴァイエスの博士論文に親しんでいたことを示すノートブックを含んでいる（注 53 ALT-A56-11）。大仰なレジスタンスの神話的立像は、彼のアピールのなかで更なる役割を演じさせたはずである。カヴァイエスは、彼の時代の最も高く評価されたノルマリアンであり、彼のヒロイズムは伝説であった。彼の現象学のヴァリエーションである実存主義に対する反感はよく知られていたし、彼のフッサールとのより技術的な決裂は、彼の出版された本の中で読むことができた。」</p> <p>140 「アルチュセールの友人であったジャック・マルタンが、カヴァイエスとカンギレムを発見し、アルチュセールに影響を与えたらしい。」</p> <p>302n37 「バタイユの論集に所収のアルチュセールの「唯物論」の項目を参照。バタイユとカヴァイエスに似ているところがないわけではないことが示唆されている（実質的な関連資料はなし）。」</p>

ゲルーと カヴァイエス	<p>42「注94へ。」</p> <p>277n94「カヴァイエスと同様に、ゲルーはブランシュヴィックの教育によって形成されているが、彼のブランシュヴィックとの接触は、第一次世界大戦前にまでさかのぼる。カヴァイエスとゲルーは短い期間ではあるが、第二次世界大戦のあいだ、一時的にクレルモン＝フェランのキャンパスに移動していたストラスブール大学で同僚だった。しかし、これらの思想家がお互いに影響を与え合ったという証拠はない。構成主義から区別された生成主義 geneticism についてのカヴァイエスとゲルーのあいだの類縁性を考えるために、ドゥス『構造主義の歴史I』とグランジェ「ジャン・カヴァイエスと歴史」を見よ。」</p> <p>281n8「カヴァイエスとゲルーの間に個人的な関係はほとんど存在しないが、グランジェとヴェユマンの著作がそのあいだの実質的なつながりを代弁している。」(ただしグランジェの論文には、一回だけゲルーへの言及があるがそこでゲルーについて詳述しているわけではない。ゲルーへのまとまった記述は、<i>Hommage à Martial Guéroult</i> のグランジェとヴェユマンの記事。その他はヴェユマンなどの著作からの間接証拠のみ。雰囲気以上の決定的証拠と呼べるものはないように見える。)</p>
ドゥサンティとメルロ＝ポンティ	<p>96「(メルロ＝ポンティがメンターだった時の話。ドゥサンティ曰く、)「私自身は遍在する神として思考しているので、私のなかにあるアイデアの連結と内的産出と一致している。」それにたいしてメルロ＝ポンティは、目線を上方に泳がせつつ曰く、「ドゥサンティ。君が今しがた述べたその言葉に何らかの意味を君が真剣に認めることは、それがどんな意味であれ、不可能であるように私には思う。私の立場としては、今私が聞いたとおそらく考えられるいかなることをうそぶくことはできない。」ドゥサンティはこのとき、メルロ＝ポンティが言ったことの意味を真剣には理解することができなかった。できるようになったのは後年になって、連続体の記号標記について考えるようになったとき。2の$\times a$乗という記号の「意味作用の直観」を実効的に「満たす」ことは不可能であるということを考えるようになってから。」</p>
ドゥサンティとアルチュセール	<p>100-102「ドゥサンティは、1940年代に、アルチュセールを党(フランス共産党)に勧誘している。」</p> <p>135「ドゥサンティとアルチュセールは、40年代に、前者が後者にスピノザとフランス共産党を教えたという点で強く結びついているし、実存主義(さらには諸々のブルジョワ哲学)を敵としている点でも一致している。その亀裂を決定しているのは、一つは、ドゥサンティの政治的な判断ミス、つまりフランス共産党におけるスターリニズムの固持と、現象学における意味の源泉としての「自我」の保持である。アルチュセールの哲学は、この二点への批判として理解することができる。」</p> <p>291n71「1948年3月18日に行われたドゥサンティによるスピノザについての講義のアルチュセールによる手書きノートからの抜粋。「宗教と数学のあいだでのこの感染。」「数学の知識は救済を意味している!」「この物理-宗教-数学のあいだの感染、この相互作用は、それらの反省の水準の外部であるある起源を必要とする。」「スピノザの時代のこれらの[等しくない]要素のあいだの具体的なリンクを求めること?三つの要素は、ブルジョワジーの誕生を表している。」(すべての強調は原典による。ALT2-A60-09, Notes sur Spinoza (2), Fonds Althusser. ここで言われる宗教-数学-物理学のトリアードは、カヴァイエスのそれとよく似ている。)</p>
アルチュセールとメルロ＝ポンティ	<p>136-137「若きアルチュセールにとっての教師、メルロ＝ポンティ。」</p> <p>140「アルチュセールは、メルロ＝ポンティを、19世紀のフランス思想(クーザン、ラヴェッソン)のなかで制度的に最も支配的であったスピリチュアリズムの復活として見ている。」</p> <p>296n36「アルチュセールは、サルトルよりもメルロ＝ポンティを好んでいた。」</p>
アルチュセールとグループスピノザ	<p>176グループスピノザの図</p> <p>177-178「不幸なことに、「他者のイメージにおけるスピノザ」と、このスピノザと箱に入っているスピノザとをつないでいるラインによって意味されているかもしれないことを示唆する補助資料は、この文章資料の中には存在しない。(Michel Tort が、フランス哲学のなかで当時いくつかの流行のスピノザのイメージがあることをトートは伝えようとしていたということがもっともらしい)」</p>

アルチュセールとゲルー	282n8 「ゲルーのスピノザ論が、ENS の学生のあいだで「グレートヒット」だったことをアルチュセールは『未来は長く続く』で述べている。」「ゲルーの徹底したノンポリなスピノザ解釈に不満を述べている。」
-------------	---

引用文献一覧

- CAVAILLÈS, Jean. «Enquête. La Jeunesse protestante et l'avenir du protestantisme en France.» *Foie et vie chaier A*, 1 1925: 130-135.
- «Au fil des livres. La philosophie de Plotin.» *Foi et vie* 20 (12 1928): 1166-75.
- «Transfini et continu.» Dans *Philosophie mathématique*, 253-274. Paris: Hermann, 1962.
- *Méthode axiomatique et formalisme. Essai sur le problème du fondement des mathématiques*. Paris: Hermann, 1981.
- *Sur la logique et la théorie de la science*. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin, 2008.
- FERRIÈRES, Gabrielle. *Jean Cavaillès. Un philosophe dans la guerre 1903-1944*. Paris: Édition du Félin, 2003.
- PEDEN, Knox. *Spinoza Contra Phenomenology: French Rationalism From Cavaillès to Deleuze*, Stanford University Press, 2014.
- SHRIFT, Alan D. *Twentieth-Century French Philosophy: Key Themes and Thinkers*. Bluckwell Pub., 2006.
- “The effects of the agrégation de philosophie on twentieth-century French philosophy.” *Journal of the History of Philosophy* 46 (3), 2008: 449-473.
- SINACEUR, Hourya-Bennis. «Jean Cavaillès, Lettres à Étienne Borne (1930-1931) , avec présentation par H. B. Sinaceur.» *Philosophie* (Les Édition du Minuit) 107 (2009): 3-45.
- カヴァイエス, ジャン. 『論理学と学知の理論について (構造と生成II)』. 翻訳者: 近藤和敬. 2013.
- ブレイエ, エミル. 『現代哲学入門』. 翻訳者: 河野與一. 岩波書店 (岩波新書) , 1953.

本研究はJSPS科研費25284006の助成を受けたものです。

